

ギャップを超えて伝える

鷹取 裕成

I. はじめに

「ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。…律法を持たない人々に対しては、——私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。」

(コリント人への第一の手紙 9 章 20-21 節)

聖書の真理を伝えるということは難しいものである。私自身、クリスチャンになって 45 年、牧師になって 30 年余り経つが、いまだに、このように話せばよいというものを見出していない。メッセージをするごとに、こう話せばよいだろうか、ああ話せばよいだろうか、模索しながら四苦八苦ししている。神学校で説教を学び、説教演習を受け、聖書から語るということが何であるかを、実によく教えていただいた。それが私のメッセージの基礎になっている。ただ、そこで想定されていた「メッセージの場」は、できあがった教会、つまり、主を愛し、日曜日には当然のように礼拝に集い、聖書からメッセージを聞きたいと思っているクリスチャンが大部分であるような教会であったと思う。

しかし、私自身は、以前に牧師をしていた教会も開拓的な教会であったし、現在牧師をしている 2 つの教会も十数年前から兄弟姉妹とともに開拓して来た教会で、ずっと開拓伝道的な環境の中にいる。そんな中で日本人に聖書の真理を伝える難しさを感じ、あれやこれや自分なりに工夫して来た。ここに述べることは、そのような自分の経験に基づくことで、神学会誌に載せるにはおこがましいように思うが、伝道の現場におられる方に少しでも参考にしていただければ幸いである。

II. ギャップ

1. ギャップが存在する

聖書の真理を一般の日本人に話す上で、大きな障害あるいはギャップを感じる。それは、信じる者と信じない者との間のギャップという意味ではない。もちろん、一般の日本人はたいがい未信者なので、そのギャップもあるが、それは日本人に限らず、人類に普遍的なギャップであり、聖霊の奇蹟がなければ決して埋まらないギャップである。ここで言うギャップは、信じるか信じないか以前に、話していること自体が伝わらないコミュニケーション上の問題である。何を話しているのかさっぱりわからないとか、別世界の話のようで、自分とどう関係するのかわからない、といったことである。

2. 用語によるギャップ

ギャップの原因のひとつは用語の問題である。牧師は神学用語や教会用語になじんでい

るために無意識のうちにそのような用語を使ってしまふことがある。たとえば、「特別恩寵」、「位格」、「戒規」、「陪餐」といった用語である。それは一般の人にとっては外国語であって、到底理解できるものではない。私たちは神学用語や教会用語を使わないように注意する必要がある。しかし、たとえそういう用語を使わず、やさしい言葉で話したとしても、日本の一般社会では、神や信仰についての言葉は日常ではほとんど聞くことがないので、なじみのない言葉、なじみのない表現となってしまう。たとえば、「生まれながらの罪」という言葉はけっして難しい言葉ではないが、「業務上過失致死罪」という専門用語のほうがニュースで聞きなれているので、ずっとわかりやすいのである。

3. 関心の違いによるギャップ

ギャップの原因のひとつは関心の違いである。言葉は真空中で語られるものではなく、ある状況、ある関心の中で語られるものなので、関心のある人には大いに意味があっても、関心のない人にはほとんど意味がないことが多い。イエス・キリストの福音も、旧約の、創造主なる神、律法、終わりの日のさばきなどを前提にして、いかにしてそのさばきを免れるかということに関心のある人々に対して、「良き知らせ」として語られたものである。パウロもパリサイ人として厳格な生活をしながらも、神に義と認められないのではないかという不安を持っていた。そんなパウロにとって、信仰によって義と認められるという福音は文字通り「良き知らせ」であった。

ルターも当時の教会の律法的な教えによって、神のさばきを恐れていて、善行に励んでもその恐怖は募るばかりであった。そんなルターにとって福音が求めていた救いであった。ウェスレーはモラヴィア兄弟団との出会いをきっかけに回心するが、それよりずっと以前、オックスフォード大学で仲間とホーリークラブを始めたほど、きよい生活に関心があった。一般の日本人にそのような関心がどれほどあるだろうか。皆無とってよいほどではないだろうか。そんな日本人に福音を伝えても、ほとんど意味のないものになってしまうのである。

4. 宗教的背景とくに神概念の違いによるギャップ

一般の日本人は神道や仏教という多神教の宗教的背景を持っている。聖書の唯一神教と多神教との違いは、単に唯一か多数かという数の違いではない。この世界の中に住んでいる神か、超越した神かの違いであり、神中心の宗教か、人間中心の宗教かの違いであり、永遠普遍の真理や正義があるか、そうでないかの違いであり、神は何もかもお見通しであるか、そうでないかの違いである。これだけ違えば、人々の考え方も宗教に対する姿勢もまったく違って来る。

たとえば、多くの日本人は、ひとりで幾つもの宗教を持っている。神社仏閣があれば、宗派にかかわらず、お参りして手を合わせる。行事のときには伝統的しきたりを守ってお参りするが、普段は無関心である。若い世代は、あまり神社やお寺にお参りしないので、宗教とは無縁であるかのように見えるが、オカルトや占いは盛んだし、初参りは増加の一途をたどっていて、けっして無縁ではない。自分では無宗教だと思っけていても、クリスチャンである私たちから見ると、事あるごとに多神教的な考え方が出て来るのである。そのような多神教の宗教的背景を持つ一般の日本人にとって、キリスト教は別世界の話であって、容易に受け入れられるものではない。

中には、キリストを簡単に受け入れる人がいる。救われたと言って喜び、集会に集い、クリスチャンの交わりにも楽しそうに参加している。しかし、何かが違う。よく聞いてみると、日本にはいろいろな宗教、神々があるけれど、日本の神々はあまり好きではなかったところ、キリスト教の集会で感動したので、キリストにしようと思ったというのである。そういうことも求道の一段階としてはありうることだが、その時点では、キリストを唯一の神のひとり子として信じているのではなくて、多神教の神々のひとつとして信じているのである。

5. 教会のゲッター化

以上のようなコミュニケーション上の問題があるにしても、かまわず、神の言葉をそのまま、聴衆が理解しようとすまいと、黙々と語って行くという行き方がある。それに対しては、エゼキエル書 2 章 7 節の「彼らは反逆の家だから、彼らが聞いても、聞かなくても、あなたはわたしのことばを彼らに語れ」という言葉が根拠になるかもしれない。しかし、エゼキエルの場合は、コミュニケーションの問題ではなく、その点では何の問題もないにもかかわらず、確信犯的に神に反逆している人々にさばきを宣言しているのである。迷っている人々に救いの道をどう伝えるかという問題とは異なる。

もし、用語、関心、宗教的背景などの違いを無視して語った場合、理解できない人は教会から去ってしまうだろうし、忠実なクリスチャンだけが教会に残ることになる。そして、クリスチャンは聖書的あるいは教会的な言葉に慣れ、そういう言葉を話すようになり、教会は、人々が特殊な言葉をしゃべり、自分たちだけで理解し合っているという特殊な場所になる。また、そういうクリスチャンが世の中で福音を証しようとしても、一般の人に通じる言葉では話せない。それは、教会が遊離してしまうことであるし、ゲッター化することではないだろうか。

Ⅲ. 方策

1. 未信者を対象にして話す

メッセージをお願いするときに、よく、伝道メッセージですか、クリスチャン向けメッセージですか、と聞かれることがある。伝道メッセージは未信者にキリストの救いのすばらしさを紹介するメッセージなのだろうが、クリスチャン向けメッセージとは何なのであろうか。クリスチャンに信仰生活の仕方を教えるメッセージなのだろうか、聖書の講解メッセージなのだろうか。しかし、もしクリスチャンが聞く価値のある話なら、未信者にも聞かせるべきではないだろうか。未信者が聞いてもわからない話であったり、聞かせないほうがよい話であれば、クリスチャンにとっても聞くほどの話ではないだろう。逆に、伝道メッセージがキリストの救いのすばらしさを伝えるメッセージなら、同じ話の繰り返しでない限り、クリスチャンも聞くべきだし、聞きたいものではないだろうか。これが、子供向けメッセージと大人向けメッセージの区別ということなら納得できる。子供と大人とでは語彙にも内容にも超えられない大きな差があるからである。しかし、伝道メッセージとクリスチャン向けメッセージを区別することにはあまり根拠がないように思う。

仮にクリスチャン向けメッセージというものがあつたとして、それをクリスチャンたちが集まる集会で話した場合、どんな集会にも未信者が参加しているものだが、その未信者

は理解できず、疎外感を持つことになり、躓きを与えることになる。そういうわけで、私はどんなときにも未信者を対象に話すようにしている。未信者といっても、教会で話す限り、キリストに反対の人はまず来ないので、ほとんど求道者であるが、そういう人を対象に話すようにしている。そうすれば、当然クリスチャンは理解できるし、みんなが理解できることになる。ただ、未信者を対象に話すためには、言葉や概念をかなり噛み砕く必要がある。

2. 受け入れられることだけを話す

聖書から話すときには、聖書の真理に目を開かせ、間違いに気づかせ、この世的な生き方から神の言葉に沿った生き方に導きたいものであるが、それはそう簡単ではない。人は受け入れられることは喜んで聞かすが、受け入れられないことには耳を閉ざすものである。そこで、聴衆が受け入れられないことを話しても仕方がないので、私は受け入れられることだけを話すようにしている。と言うと、まるで、テモテへの第二の手紙 4 章 3 節の、自分につごうの良いことを言ってもらいたいという、気ままな願いに答えて話すにせ教師のように聞こえるが、聴衆にへつらい、喜ぶことだけを話そうとしているわけではない。あくまで聖書の真理に導こうとしているのであるが、ただ短絡的に導くのではなく、手間ひまをかけようとしているのである。つまり、人がまだ受け入れていない新しいことを受け入れるのには、一度に飛躍することはできず、何十段ものステップが必要である。すでに受け入れていることを話して、共通認識を確認し、その土台に立って小さな一歩を踏み出すことを繰り返して行くということである。

たとえば、石垣の上にきれいな場所を見つけて、仲間に「ここにきれいな場所があるから、上って来いよ」と言っても、石垣をよじ登ってくる人はいない。しかし、その横に石の階段があって、それを一段一段上るのであれば、たいがいの人は上って来てくれる。預言者なら、人が受け入れようが受け入れまいが、理解しようがしまいが、神からの言葉をそのまま語らなければならないが、牧会者は聴衆に寄り添わなければならないと思う。

3. 教えるのではなく、益になることを話す

メッセージは「説教」と呼ばれ、教えることだと思われているが、教えることに問題を感じる。教えることには当然、その教えを憶えて実行することが期待されているわけであるが、毎週ひとつのことを教えたとしても、聴衆は1年に50もの教えを受けることになり、50もの教えを憶えて実行しなければならないことになる。それはとても大変なことである。人の話ならば適当に聞いて、役に立つことだけを選択すればよいが、まじめなクリスチャンにとっては神が語られたことなので、そういうわけにも行かない。そのため、実行しなければならないこと、守らなければならないことがどんどん増えて行き、重苦しくなっていく。実行できない自分を責めることもあろう。鬱病にならないか心配である。自分を責めるだけならまだしも、自分のことはさて置き、その批判の矛先をほかの人に向けることも多い。家族を批判し、他のクリスチャンを批判し、役員を批判し、牧師を批判するのである。牧師はその批判に耐えられるだろうか。自分が教えたことを自分自身で実行できているだろうか。

ルカの福音書 11 章 46 節で主イエスが律法学者たちに、「人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本さわろうとはしない」と言われたことを思い出

す。そこで、私は、教えるのではなく、聴衆の益になることだけを話すようにしている。益になることとは、迷いや心配から解放すること、元気になること、うれしくなること、自分を発見する助けになること、問題の解決になること、心を癒すこと、実際に使えて成果の出ること、自分の向上のために役に立つことなどである。教えることはある意味でたやすい。聖書から学んだことを話せばよい。しかし、聴衆の益になることを毎週毎週話すのは難しい。魚釣りをしたい人は、魚の釣り方を話せば喜ぶ。そのためには自分自身、魚釣りができなければならない。

4. 自分が消化していることだけを話す

聖書を研究すると多くのことを学ぶが、学んだということと、消化して自分のものとなっているということとは別のことである。消化し、自分のものになるためには、長い時間と実体験と聖霊の働きが必要である。聖書から学んだことをみな話すと、自分が消化できていないことも話すことになるので、聴衆が消化不良になってしまう。そこで、私は自分が消化し、自分のものになっていることだけを話すようにしている。自分が知らない世界のことは話さない。自分がやって見て効果があると検証したことしか勧めない。たとえば、結婚していないときには、結婚についての聖書の教えは、自分の知らない世界だったので、いくら頭でわかっても話せなかった。今、結婚して30年近くになり、結婚の喜びも苦労も経験したので、自分の言葉で話すことができる。とはいえ、結婚していない人が結婚については一切話せないかというそうではない。結婚の問題の諸要素、愛情表現の難しさやコミュニケーションの行き違いや意見の違いや性格の違いなどは、すべての人間関係に共通したことでもあるので、自分のものとして話せるだろう。

あるいは、ヨハネの黙示録2章10節に、「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう」という言葉がある。読むごとに魂を揺さぶられる言葉である。しかし、私は死を覚悟するような迫害を受けたことがないので、この言葉を自分のものとして話すことはできない。戦時下の弾圧で投獄された牧師や共産主義諸国で迫害されたクリスチャンなら、自分のものとして話すことができるだろう。

5. 教会のためではなく、聴衆のために話す

牧師は使命感が強いので、教会の発展や世界宣教を願い、そのためにどうすればよいかと考える。そのため、クリスチャンが聖書を学んで成長するように、他の人に伝道できる人になるように、教会のいろいろな奉仕を、責任を持ってする信徒になるように、話そうとする。しかし、一般の聴衆の関心は、必ずしもそういうことではない。えてして、自分を変えたい、うまく行かない人生をリセットしたい、病気が治って元気になりたい、家庭がうまく行ってほしい、教会の中で友だちが欲しい、すてきな人になりたい、やりがいのある奉仕がしたいといった個人的なことが多い。そういう聴衆に、教会が発展するためにはどうすればよいか、世界宣教のためにはどうすればよいか、といった話をしても、すれ違っただけである。やはり、聴衆の関心のあることを話さなければ、心には届かない。

とはいえ、聴衆の関心に合わせ、聴衆が求めることだけを話せばよいのかということそうではない。むしろ、聴衆自身も気づいていない深い霊的な関心を引き出し、その関心を高めるべきである。ただ、基本的な姿勢として、教会の発展や宣教の進展のために話すのではなく、聴衆のために、聴衆の求めに答えようとして話すということである。そうしてい

れば、結果的に、教会の発展や世界宣教のためにもなると思う。

6. ひとつの主題のために多くの例話を使って話す

聖書の真理を聴衆に伝えることは、文化的なギャップや話す人の話術の限界もあって、難しい面があるが、少なくとも、何を訴えようとしているのかは、聞いたすべての人がわかるようにしなければならない。いろいろな話を聞いたが、何を言いたかったかよくわからない、ということになってはまずい。そのために大事なことは、その訴えたいひとつの主題のためにすべてを集中することである。

3つの要点を持つスリー・ポイント・メッセージは、本来はひとつの主題のための3つのステップで話すメッセージであるが、3本立てのメッセージになってしまうことが多く、散漫になりやすい。一回の集会ではひとつの主題しか伝わらないことを心すべきである。そして、そのひとつの主題に向けて、いろいろな例話を話す。その場合、例話が主題からずれないように注意する。どんな良い例話も、主題からずれると逆効果である。すべての例話の照準が主題にぴったり合っていれば、話はまずくても、訴えたいことは伝わるであろう。

IV. 準備

1. 御言葉の壁を越える

メッセージの準備として、選んだ聖書箇所と言語的考察、歴史・文化的考察、文脈的考察をすべきことは言うまでもないが、その考察によって学んだことをまとめただけで終わってしまうことが多い。あるいは、その箇所を自分の教義で解釈したり説明したりすることで終わってしまうことが多い。ベテランの牧師ならば、聖書の箇所を見ただけで、メッセージのだいたいの構想が浮かんで来るのではないだろうか。メッセージの準備をする上で、そこにひとつの壁があるように思う。その壁を越えない限り、通り一遍のメッセージになってしまう。その壁を越えたときに、聴衆の目を開くメッセージが生まれる可能性が出て来る。私はその壁を越えたいと思って、いつも格闘している。

2. 祈りと瞑想

メッセージは聖書研究だけではなく、祈りと瞑想とによって生み出されるものである。それで、私は次のようなことを心がけている。

①「しもべ聴く。語りたまえ」と言ったサムエルの姿勢が大事。つねに、「主よ。私の心に語ってください。頑迷な心をやわらかくし、目を開いてください」と祈りながら準備する。

②聖書箇所を自分に個人的に語られた言葉として読み、主の語りかけに耳を傾ける。

③次のようなことを自問する。

自分に何が語りかけられているだろうか。

自分に適用した場合に、自分は耐えられるだろうか。

通り一遍の教えではないだろうか。

自分自身がほんとうに感動しているだろうか。

④主の語りかけを聞く中で、罪を指摘されたならば、真剣に悔い改める。

3. 聴衆の声を聴く

聴衆の声を聞くことは、メッセージを準備する上で大きな助けになる。とはいえ、メッセージをする場は、講演会や会議ではないので、質疑応答をしたり、話し合いをするわけには行かない。アンケートを取るという方法もあるが、何回も取っていると面倒がられるので、あまり勧められない。私の場合は、祈り会が貴重な情報収集の場である。また、カウンセリングの場、とくに未信者対象のカウンセリングの場は、未信者がどんなことを求めているのか、教会に対してどんなことを考えているのかを知る絶好の機会である。また、苦情はけっして気持ちのよいものではないが、そのまま鵜呑みにする必要はないとしても、へりくだって耳を傾ければ、自分が気づかないことを教えてくれる良い教師となる。身内の声、妻や子どもの声は遠慮がないので、苦痛に感じることも少なくないが、頑迷な者に主が与えてくださった良き助け手である。

(チャペル・こひつじ牧師、プレイズ・チャペル・いずみ兼任)